

News Letter Vol.2 No.4

平成8年7月20日 発行

発行人 花嶋正孝

事務局 日本技術開発(株)

〒164 東京都中野区本町15-33-11
中野清水ビル

TEL 03-5385-5111 FAX 03-5385-8515

LS研ニュースレター

最終処分場技術システム研究会

平成8年度LS研定時総会開く

最終処分場技術システム研究会の平成8年度総会が5月9日13時より東京のホテルエドモンドにて開催された。

議案は次の通りである。

第1号議案

平成7年度活動報告及び収支決算報告

第2号議案

役員の変更

第3号議案

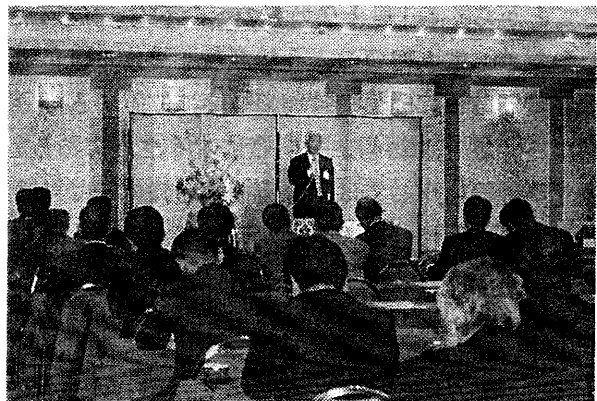
平成8年度活動計画及び収支予算

報告事項

- ・新規入会及び退会会員
- ・特許に関する取決め案

各議案とも満場一致で採決された。

(役員等決定事項は4頁に)



平成8年度総会 (あいさつする花嶋代表)

討論会
開催

これからの最終処分場のあり方と機能について

総会に引き続き討論会が実施された。

討論会は、第1部の話題提供と第2部のパネルディスカッションの2部構成で実施された。

パネルディスカッションに先立って行われた第1部の話題提供は次の通りであった。

1. 産業廃棄物を巡る諸問題 花嶋正孝代表
2. シャ水システムのあり方について 宇佐見貞彦
3. 震災と最終処分 福本二也
4. 埋立の国際動向 樋口壮太郎、水野正毅

〈パネル討論〉

「これからの最終処分場のあり方と機能について」

司会：正井敬人、コーディネーター：田中信寿

パネラー：古市徹、樋口壮太郎、押方利郎、堀井安雄

討論会の主旨(田中)：今、私たち、LS研では現状の埋立技術を確立すべく努力しているが、将来に向かって埋立地はどうあるべきかを常に念頭において進んで行かねばならない。努力の大きさが評価されるのではなく、その進むべき方向が真に評価されねばならないからである。パネラーから埋立地のイメージはどのように変化すべきか、周

辺住民との関係を改善する新しい試みはあるか、埋立地の新しい機能としてどんなものが提案できるかなどについて発言し、討論に入る。

提案1 (古市) : 埋立地について「あるべき姿」を描き、それに向かって果敢に挑戦することが大切。「あるべき姿」とは「地域融和型最終処分場」である。さらに、処分場を「土

木構造物」すなわち自然環境における「人工の器」という「場」としてのみ考えるのではなく、もの(廃棄物)の流れの中で位置づけて考えていくことが重要である。

提案2 (樋口) : 埋立地問題の根底には地中に埋めることからくる「見えないものへの不安」がある。そのため、地上処分のようなガラス張りの埋立地が必要である。廃棄物管理の最終に位置する処分側から「埋立不適物」を明確にするべきである。埋立不適物に対しては、貯留機能を強化した封鎖機能をもった埋立地の開発が必要である。コストを考える上では、埋立地の1㎡の空間を消費することは1㎡のごみ減量を行うのに必要な中間処理コストと同等であると考えべきである。

提案3 (押方) : 埋立地と水(地下水汚染)が考察の鍵を握っている。雨水に対してはクローズド型処分場、保水量の低減には埋立物の無機化、地下



これからの最終処分場…のパネラーの面々

水侵入に対しては遮水工の強化で対応する。埋立技術の公開によって住民の不安を解消する。埋立基準の強化と共に埋立地には必ず中間処理場を併設するという考えが大切。

提案4 (堀井) : ごみ質が今後どのように変化していくかという展望を持つことが大切。「地域住民に開かれた、住民参加型処分場」を目指す。具体的には3つの提案を行う。1) 資源回収利用型ランドフィル: 浸出水中成分や処理水の再利用、貯留したごみからごみ燃料の生産。2) 情報公開型: 管理情報をリアルタイムにビジュアル化して発信。3) 生態系保護型: 膜処理技術の導入、生態毒性評価指標の導入など徹底した浸出水処理。

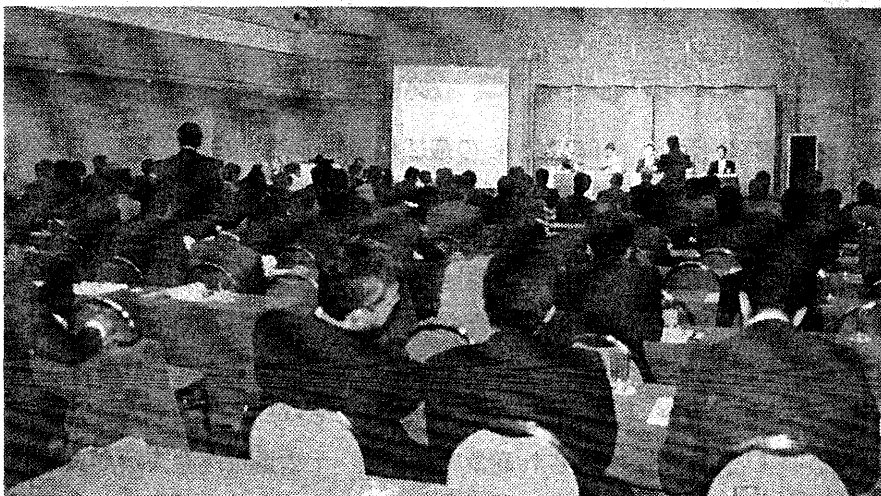
討論: 1) 住民参加・情報公開、2) 埋立地はどんな形になっていくか、について討論した。フロアからの発言の要点をまとめる。

・埋立地の立地場所について議論する必要がある。

反対がより少ない山の中に作るという発想ではなく、都市内に分散立地するとか、官庁の庁舎の下に作るとかを考える。

・水の流れを把握するのが難しい山間に埋立地を考えることに問題あり。(別の発言では)山の方が水の流れがシンプルで制御しやすい。

・埋立地の技術を科学的に説明する。人工のバリア



多くの参加者を集めた会場では活発な討論会が行われた

は百年オーダーで考えるといずれはなくなるのであるという事実、完全に漏れないというのではなく多重安全型にして健康リスクを最小にするのであるという説明を市民に対して率直に行うことが重要。

・設計者自らが自信を持てるかどうかを自問し、一層の努力と論理構成を行う。

・捨てるだけという住民のごみに対する認識を変えること。埋め立てるものを変えない限り住民の不安はなくなるのではないか。処分場なんて無くてもよいというぐらいの覚悟でごみを減らしていく。

・埋立地の設計管理にもっとお金をかけて完全を

期す。そのためには少数の埋立地に数を限定するべき。

まとめ：埋立地の問題を埋立地の技術のみで考えることができないことに難しさがある。廃棄物管理全体での埋立地の役割、管理制御できる埋立物とは何か、埋立地における安全とは何か、などである。LS研における埋立技術確立の努力に際して、参加者一人一人がこのようなより大きな課題も意識して取り組むことがますます大切であることを痛感した。時間不足で十分な議論ができなかった。次回にもぜひパネル討論を継続したい。

(文：田中信壽)

研究 発表会

4部門16テーマ の成果熱心に発表

総会と討論会を行った翌日10日には平成7年度の各分科会の成果発表会が実施された。今年も、午前10時から午後6時までのロングランとなったが、活発な質疑応答が行われた。

各分科会の活動概要（平成7年度実施事項）は次の通り。

I システム計画研究グループ

1. リスク管理

・廃棄物及びその受入施設を主にしたリスクの同定と管理技術の検討

2. 処分場計画論

・地域融和型最終処分場の構築のため保管処理機能、環境保全機能及び地域還元の3機能の検討

3. 情報管理

・管理を行なうために必要な情報項目の整理・抽出と情報管理のあり方を中心とした研究

II 構造研究グループ

1. 浸出水処理システム

・処理施設の規模の決定、計画流入水質、放流水質の決定、処理方式の調査、

検討の実施

2. シャ水システム

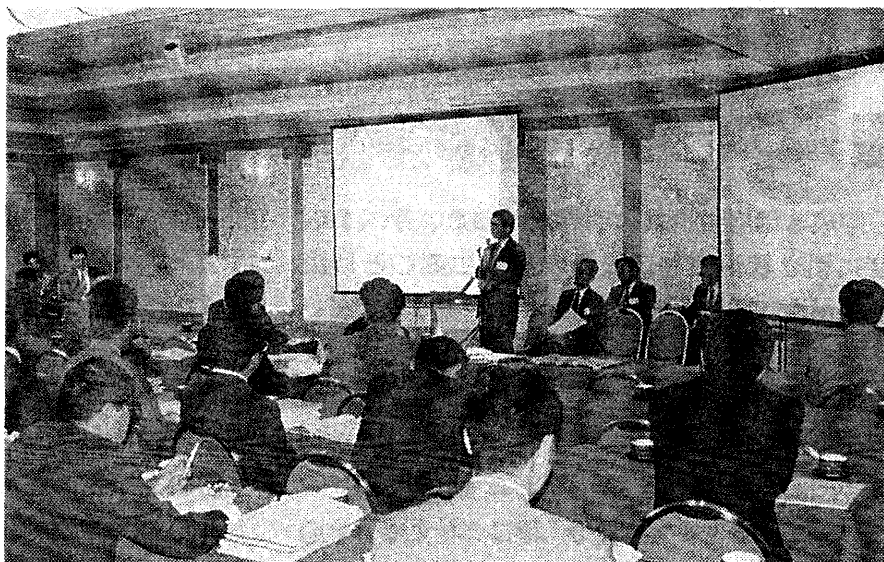
・シャ水システムの概念の整理とシャ水工を中心とした施設設計、施工に関する検討

3. シート規格

・シート規格特性項目の中で、シートの基本特性、品質管理項目、接合強度の保証についての検討。

4. シート固定工

・シート固定工の固定性能（実力値）を把握するために実物大の固定工を製作しフィールド試験を



研究成果を熱心に聞く研究発表会場

実施。

5. 下地性状

・下地性状に関するアンケート及び文献調査、水圧シート試験の実施。

6. 施設構造

・貯留構造物の定義、設置目的、要求機能、構造型式、所持すべき安全度と設計上の課題の検討

Ⅲ 施工研究グループ

1. シート試験方法

・しゃ水工を構成する各材料の特性、保護マットの保護効果把握のための特性実験の実施。

2. シート施工

・確実な施工の実施とその確認のための検討

3. 基盤整備・法面施工

・基盤整備に係る基本的な造成工事、地下水処理、アースライニングについての技術資料作成。

4. 施設施工

・集排水施設の設計における集排水能力、空気供給能力、ごみ圧耐荷性の検討、使用材料のまとめ。

Ⅳ 維持管理研究グループ

1. 埋立管理

・維持管理技術報告書案の作成、埋立層の高密度化が準好気性構造に及ぼす影響把握のための室内試験の実施

2. 水質管理

・維持管理技術報告書案の作成、浸出水中の有害物質等水質調査計画立案

3. 施設管理

・維持管理技術報告案の作成、モニタリングを中心とした各構成設備毎の検討

役員（平成8年度）

平成8年度の役員の改選が行われ、平成7年度に引き続き現在の役員が担当することに決まった。

代 表 花嶋 正孝

副 代 表 田中 信壽

副 代 表 古市 徹

専門部会幹事

コンサルタント部会 樋口 壮太郎

建設部会 山岡 亮介

しゃ水工部会 上田 滋夫

水 処 理 部 会 伊藤 三郎

会 員

(1) 新規入会会員

1) しゃ水工部会

日建工学（株）

2) 水処理部会

扶桑建設工業（株）

(2) 退会会員

（株）小松製作所

以上により、平成8年5月現在での会員数は以下の通り。

学識会員	4名
建設部会	23社
しゃ水工部会	46社
コンサルタント部会	19社
水処理部会	14社
合計	4名、102社

編集後記

総会から早2ヶ月が経過しています。遅れましたが、総会・発表会特集号をお届けします。

今回の総会の1局には妙手が二手ありました。一手目は本紙中に田中副代表に書いていただいたように、会場参加型のパネルディスカッション形式で、これからの処分場について討論を行ったことです。静かなパネルになるのかなという不安もありましたが、やはり今最も注目されている分野であり、活発な議論が出来て良かったと思えました。二手目は、厚生省、環境庁及び県を主体とした行政の方に出席していただいたことです。25団体、36名の方に参加いただき、一日目のパネルディスカッションでも貴重なご意見を頂いたり大成功だったと思えました。

来年もこのような仕組みで有意義な発表会が出来るようにしっかりとした成果を出したいものです。

紙面の関係上各分科会の成果の記載が2、3行となり実際の成果が反映されていないかもしれません。詳細は報告書を読んでいただくとしてご容赦下さい。 (三崎)